



**Heavenly World,  
Worldly Heaven**

## 序章

---

何の変哲もない交差点。

それが俺たちの出会った場所だった。

煌く星空の代わりにヘッドライトが周囲を照らし、色とりどりのネオンの代わりに3色の信号機があった。こんなところが思い出の場所だなんて、雰囲気もなにもあったもんじゃない。

本線である国道に、地元の間しか使わないような古い道が交差していて、交差点だけど通行量は本線だけにひどく偏っている。

もうこれくらいの時間になると、横断歩道につけられた信号機は押ボタン式になる。それと同時に、本線を走る車たちは気が違ったみたいにスピードを上げやがるんだ。

片隅に置かれた花束に、俺は溜め息をついた。

ボタンを押して俺は横断歩道の手前でぼんやりと考える。

…考えたら俺、ずっとこの場所を通るんだよな。通学路だもんな。

それが辛いような、嬉しいような、複雑な気分で俺は俯いた。

何も変わらない。

この交差点も、周りの奴らも、俺自身も。

肩にかけたスポーツバッグとは別に、俺の小脇に抱えられた青い袋。先ほどレンタルビデオ店で借りてきたばかりのそれが、唯一、変わったといえば変わったものかもしれなかった。

目の前の信号が青になる。

俺はふと、周囲を見回した。

まさか、あいつの姿を見つけられるんじゃないか、なんて思っちゃいない。思っちゃいないけど、それでも俺はどこかで期待してるんだろうか。

他に何も無いこの交差点で、探すとならばそれしかないんだから。

**Heavenly World,  
Worldly Heaven**

俺は腕時計を見た。

午後8時。

まあ、部活の後はいつもこんなもんだ。

それに、部長を務める俺が、誰かより先に帰るわけにはいかない。

なんてカッコつけたところで、人間は生きてるから腹が減る。さっきコンビニで買った袋を開けて、俺は歩きながらぬれせんべいを口に入れた。

3年になると同時に、俺は高校のサッカー部で部長を務めることになった。それから1ヶ月経って、やっとその立場にも慣れてきたところだ。

同じ駅の後輩が何人かいるが、こっち側の道を通るのは俺だけだ。話し相手もない夜道をひとり歩いていると、忘れていた空腹が急に甦ってくる。だからこうして、ここを菓子を片手に歩くのは、俺の日課になっていた。

狭い道沿いに歩いていくと、いつもの交差点が視界に入った。ここは国道とぶつかっているせいか、とにかく信号が長い。

だが、もう3年も通ってりゃいい加減慣れる。俺は横断歩道の手前に立って、次の煎餅を取ろうと袋の中をまさぐった。袋の端か何かに引っかかって、片手じゃうまく取れない。俺は少しイラついた。

「ぬれせんべい、好きなの？」

突然、背後からした声に俺はさっと身を翻した。

動いてからすぐに、それが女の声だってことを思い出す。身構えるような相手じゃない。

相手の気配にまるで気がつかないほど、ぬれせんべいに夢中になっていた自分に舌打ちする。

「ああ…まあな…」

言いながら構えを解き、相手と正面から対峙した瞬間俺は息を飲んだ。

目の前の彼女は、肩くらいまでの髪で、どちらかというとな華奢な印象だった。まあ、毎日のように体格のいい部員たちを見慣れている俺に華奢と言われても、本人はあまり喜ばないかもしれないが。

特別に美人ということもないが、愛嬌のある顔立ちをしている。

だが、俺が息を飲んだのは一

「きのこくん、同じ高校なんだね」

その言葉どおり、彼女が身に付けているのも氷帝学園の制服だった。まあ、年恰好からいって高等部だろう。うちは巨大な学校で生徒数も半端じゃないから、同じクラスでもない限り、もし彼女が3年だとしてもお互いに面識がないのは仕方のないことだ。

「ああ、3年だ…それより今、なんて呼んだ？」

「きのこくん」

「……。」

何の悪意もない笑顔でそう繰り返され、俺は頭を抱えなくなった。

こないだ髪を切ったとき、前髪をあまりにもきれいに切り揃えてしまったせいで、学校でも部でもネタにされ続ける日々だったが、まさか初対面の人間にまでそんな言われ方をするとはい。

「あのな。俺は明智だ。明智秀真」

「明智…くん？ あたしは、工藤亜姫。よろしくね」

「よろしくって、おまえ……。自分の立場、わかってんのか？」

「え、なにが？ それより、一緒に途中まで帰らない？ あたしも、こっちが家なんだ」

やっぱり分かってないな…。

まあ、こういうタイプの人間には慣れているし、それに彼女は、なんだか放っておけない気がした。

俺たちは横断歩道を渡り、人通りのない寂しい道を、並んで歩いた。

(1)

---

★ ★ ★

俺は畳の上に仰向けに寝転がった。

ほんの気まぐれと、少しの偶然。

彼女と出会ったのが運命というなら、そうかもしれなかった。

あの時点では何も予想してなかったな。

まさか、あんなふうに答えるなんて…自分でも、いまだに理解できない。いったい、どういうつもりだったんだろう。

★ ★ ★

俺は彼女がいなかった。

自分で言うのもなんだが、その気になりさえすれば、そして相手を選ばなければ、彼女なんていくらでもできたと思う。それは俺自身に魅力があるかどうかじゃなくて、校内でも人気のサッカー部で部長を務めている限り得られる既得権益とも呼べるものだった。いや、他の部員たちによれば部長でなくても、よほどのことがなければ1回くらい告白された経験があるものらしい。

だが、そんなことに意味なんて感じなかったし、興味もなかった。それよりも、週末の練習試合のことや、引退後の次期部長をどうするかという人選のことの方が、俺の頭を支配していた。

告白してくる女子は、後を絶たなかったが、俺は丁重に断った。

もっとも、丁重にというのは俺の一方的な思い込みだったようで、2年の秋頃には「明智くんは冷たい」という悪評が流れたこともあったが。

そんな経緯もあって、今では月に1人か2人、半ば度胸試しのように告白してくる女子がいるくらいだった。その日は、部活が終わった後を狙って、そんな女子が1人やってきて、例によって涙ぐみながら頭を下げて去って行った。

まあ、いきなり罵声を浴びせることもなく、一礼くらいはしていく常識があるのだから、きっと俺以外の良い彼氏ができることだろう。

俺だって、その気もないのにつきあうよりはと断っているが、仮にも自分を好きだと言ってくれた人間が目の前で泣いているのを見て、心が痛まないわけではない。少し憂鬱な気分で、俺はいつものように細く薄暗い道を、ぬれせんべい片手に歩いていた。と、歩き始めてすぐに、後ろから肩を叩かれた。

「…なんだよ。俺は今日は、そんなテンションじゃないんだ」

もう相手はわかりきっている。

出会った日からほとんど毎日、俺はこいつとこの道を歩いていた。

学校で見かけることもあったが、敢えて声をかけようとはしなかった。まあ、俺も1人じゃないことが多かったし、声をかけたところでどうしていいかわからなかったし、それに、限られた場所で会話するだけの関係にとどめておく方がいいように思えたからだ。

「見たよ、明智」

彼女は意地悪そうににやっと笑って言った。

その「見た」が何を指しているのかは、聞き返すまでもなく分かりきっていた。俺は憮然として、彼女から顔をそらした。

「モてるんだね～、明智って」

「そういうテンションじゃないって、言っただろ」

前を向いたまま俺がそう言うと、亜姫は俺の後を懸命についてきながら続けた。

「なんで彼女、作らないの？」

「別に」

細々と説明する気にもなれず、俺は一言で片付けた。

なんだか気まずい沈黙が落ちた。俺が憂鬱になっているから敢えて明るく接してきたのかもしれない、と今さらになって思い当たった。だけど、わざわざ口に出して謝るのはおかしいし、急に明るく振舞うのも不自然に思えた。

どうにかしたいけど、どうにもできない。そんな葛藤を抱えながら、俺たちはただ無言で歩き続けた。

「……」

なんとなく、彼女の気配が変わったことに気付いて、俺は足を止めて振り返った。

亜姫は立ち尽くしたまま、少し俯き加減で何かを言いよどんでいた。

「あ、あのさ…」

まさか。

俺は自分の胸に去来した第六感を打ち消そうとした。

だが、予感は大当たりだった。



「もし…もし、ね。明智がよかったらだけど…その…」

当然のことながら、この時点で亜姫のことを恋愛対象として意識したことはなかった。ただ、こうして帰り道にどうでもいい会話を繰り返す日々は、悪くないな、とは感じていた。

「あたしと、つきあってほしい」

「…本気か？」

聞き返す俺に、亜姫はこくりとうなずいた。

期待と不安の入り混じったその表情は、これまで告白してきた女子たちと同じ種類のものだった。

それを目にして、俺が彼女の告白を断ったらどうなるんだろう、という漠然とした不安をおぼえた。こうして今までで、下らない会話をしながら一緒に歩くことはできなくなるのだろうか。だとしたら、彼女の何かの気持ちのやり場はどこに向かうのだろうか。

ただ、そうした不安とは別に、何かが俺の胸に訴えかけてきたんだとも思う。彼女に自覚はないだろうが、もしかしたら気迫が他人とは違ったのかもしれない。

「…いいぜ」

気がついたら、俺はそう答えていた。

理由はわからない。

でも、考えてみれば恋愛にいちいち理由なんてない。と、思った。

「ほ、ほんとに!？」

彼女はぱっと顔を輝かせた。

この時、俺は初めて 知った。告白した女子にOKすると、どういった反応があるのかを。好きな相手に受け入れてもらえるということが、こんなに嬉しいものなのか。自分に断られて泣いている女子ばかり見続けてきた俺としては、恋愛なんてするものじゃないと思っていたが、少し考えを改めた。

まあ、改めるも何も、俺は今から恋愛を始めることになったのだが。

「じゃ、じゃあ！ 今日からあたし、明智の彼女だって言いふらしていいってことだよね！」

「言いふらすって……おまえ、他に言い方ないのか？」

ふと、気付いた。

彼女は自覚していないが、学校でも彼女をアピールするつもりなら、色々と不都合が生じてしまう。

俺は先回りして念を押した。

「ただし……学校ではあまり一緒にいられないぞ。それでもいいか？」

「え、なんで？」

やはり分かってない。

首をかしげる彼女に、俺は一瞬だけ躊躇した。

「……、俺の彼女だと分かったら、ファンに何されるかわかんないだろ」

「あ、そっか……サッカー一部の部長さんだもんね。そりゃそうだよね。わ、なんか芸能人みたい」

俺の言葉に、亜姫は素直に笑ってみせた。

今、俺は取り返しのつかないことをしてしまったんじゃないだろうか。

急にそんな思いが頭を過ぎった。

けど、無邪気に喜び、そして俺に抱きつく亜姫の姿に、俺はそんな考えを打ち棄てた。

(2)

---

★ ★ ★

本当に、なんでつきあうことにしたんだろうな。

キッカケは今でも、我が事ながら理解に苦しむ。

放っておけなかったのも確かだし、他にはない興味をそそられたのも確かだろう。

けど。

今になって思う。

もしかしたら俺は、あの頃から既に彼女に魅力を感じていたのかもしれない。

ただ、つきあう前から好きだったなんて、そんなカッコ悪くて、悲しいことを、認めたくなかっただけなのかもしれない。

寝転がったまま首だけ動かすと、視界に写真立てが入った。

仏頂面で写真におさまる俺の姿が滑稽だった。

★ ★ ★

待ち合わせ場所に行くと、彼女は既に来ていて手を振っていた。

俺は彼女のそばに立ち、そっけなく「ああ」とだけ言った。

駅前には人が多くごった返していた。

「ねえ、秀真…今日はどうしよっか」

「そうだな…」

あてもなく駅前を歩き始めながら、俺たちはそうやって他愛のない会話をする。といっても、彼女が一方向的に話して、俺は短く相づちを打つだけなのだが。

つきあい始めて2ヶ月が経っていた。

帰り道のひと時だけでなく、休日にも一緒にどこかへ出かけた。

付き合い始めて2週間ほど経過した頃、彼女が主張したのは至極もつともなものだった。それに俺が反対する理由もなく、それから練習試合のない日はこうして2人で出かけるのが常となっている。

「あ、あれ見て！ 可愛い♪」

そうやって俺の袖を引っ張った亜姫は、道沿いの店が出しているウィンドウ内のクマのぬいぐるみを指した。それは人間の子供ほどもある大きなもので、確かに愛嬌のある表情でこちらを見つめている。

「なんか、亜姫みたいだな」

「え、ちょっと、それどういう意味!？」

「そのまんまだろ」

くくっと笑いを漏らす俺に、亜姫はむくれてみせた。

ファッションビルに入って一通りウィンドウショッピングをした後、空を見上げると、待ち合わせの時にはほぼ真上だった太陽がだいぶ傾きかけていた。俺たちはいつも行く喫茶店へと足を向ける。

そこはセルフサービスの店で、俺はカウンターで注文した。

「じゃあ…ホットコーヒー」

「あたしも!」

「…を2つ」

すかさず声をあげる亜姫。俺は注文を付け加えた。

「お2つでよろしいですか?」

俺は店員に頷き返した。

本来なら、俺は別にコーヒー党じゃない。だが、この店をいつも利用するのには別の理由があった。

注文したコーヒーを載せたトレイを受け取り、俺は客席へと向かう。そこは細かく仕切られていて、ちょっとした個室のような雰囲気が味わえた。

もちろん仕切りといっても、完全に仕切られているわけではないから、店内の喧騒はそのままだし、広さもそれほどではない。だが、なんとなく落ち着いた。

「あーあ、あの服かわいかったな〜」

席につくなり、亜姫はそう言った。

俺たちはいつもウィンドウショッピングだ。まあ、有名店で買い物するような金なんてあるはずがない。

カップを手にとり、俺は一口コーヒーをすすった。

またいつものように、他愛もない会話を繰り返すのだろうと思っていた。

だが、彼女は急に暗い顔で俯いた。

「ん? どうした」

「…ねえ、秀真。秀真は…あたしといて、楽しくない?」

彼女の言葉の意味が理解できなくて、俺は眉を寄せた。

確かに今まで1度も口に出したことはないが、俺は毎週のこの、一見すると退屈なようなデートが、心から楽しいと思っていた。

「なんでだ？」

「…楽しくない、っていうか…あたしといるのヤダ？」

「もしそうだったら、毎週毎週会いにくるワケないだろ？」

溜め息混じりに、俺はそう言った。

亜姫は「うん…」と返事はしたものの、表情は浮かないままだ。

「さっきの店員さん、あたしたちのこと、すごくジロジロ見てたでしょ」

「ああ…感じの悪い店員だったな」

「ああいうの…初めてじゃない。たぶん…秀真がカッコいいから」

俺は思わず苦笑した。

「そういう視線じゃなかったと思うけどな？」

「秀真がカッコいいから、あたしみたいなのと何でつきあってるんだろうって…そう思ってるのかなって…あたし、そんなふうを考えちゃって」

ようやく俺は、彼女の表情が暗い理由に行き当たった。

それで悩んでいたのか。

「それに秀真も、デートしてるときは、いつもよりもあたしのこと見てくれないし…口数もますます少なくなってるし…」

「人ごみが苦手なんだ。前にも言っただろ？」

「けど、なんか色々考えたら…悲しくなってきた…」

そこで言葉を切り、彼女は再び俯いた。

たぶん、今に始まったことじゃないだろう。しばらく前から、そのことで悩んでいたに違いない。

俺は発作的に、彼女を抱きしめたいと思った。力いっぱい抱きしめてやりたいと。

「バカだな」

「バ…バカって…！ あたしは真剣にっ……！」

反射的に顔を上げた亜姫に、俺はにやっと笑って言ってやった。

「俺がおまえのこと好きだって言ってんだ、人の視線なんかどうだっていいだろ」

「…わ…秀真…」

目を輝かせた亜姫は、俺をその目でじっと見つめる。

「好きって…初めて言ってくれた…」

「フン…」

俺は鼻で笑って、再びコーヒーを口にした。

「ねえ…もう1回言って？」

「なんのことだ？」

「ええ～、ちょっと～。もう1回だけ、ね？」

言い募る亜姫に、俺はにやっと笑うだけで答えない。

彼女の顔に笑顔が戻ったことで、俺は安心すると共に、自分まで淡い幸福感を感じていた。

なんて、口が裂けても言葉にしてやらないからな。

俺は内心、そう言った。



夕食を終え、残っていた課題を片付け、俺は部屋に布団を敷いた。

明日も朝練がある。それに備えておかなくては。

借りてきたDVDは明日見ることにしよう。

最後まで残るのもそうだが、誰よりも早く行くのも部長の務めだと、俺は思っていた。別に規則ではない。ただ、上に立つ者が先頭に立たなくては、下の者についてはついてこないと思っただけだ。

現に先代の部長は違った。彼はまた別の方法で部を統率していた。プロセスは多種多様で、それに正解などないのだと思う。あるのは結果だけなのだ。

俺は布団に入ると、眠るまでの供にと文庫本を手にとった。

たまたま手にとったそれは、怪談本だった。俺がその手のものが好きだということは、部内では有名な話だ。

だが、今夜の俺はそれを棚に戻した。読む気分ではなかった。

俺はどうすればよかったのだろうか。

ふいに思う。

そしてすぐに振り払った。

もっといい方法はあったのかもしれない。けど、その可能性を探るということは、既に過ぎ去った時間を否定することだと思った。

俺は精一杯、自分なりに、彼女を想い、そしてそれを伝えたんだ。

正解など、ない。



「ピアノ？」

俺は眉を寄せて彼女を見つめた。

2人で並んでゆっくりと、いつものように薄暗い人気のない道を歩いていた。

「うん…夕方、日が沈む頃になると、聞こえてくるんだって…。でも、見てみると誰もいないの」

「ベタベタな話だな…」

俺は呆れたように溜め息をついた。

そっけない反応を見せる俺に、亜姫は泣きそうな表情で見つめた。

「でも、ホントなんだって！ 教室で誰かが話してるの聞いたんだから！」

やれやれ。

確かに季節は、もうすぐ夏休みだ。夏といえば怪談であり、七不思議であり、そして学校はそれらの宝庫だ。宝庫というよりも、原産地といった方が正確なのかもしれない。

だが…こいつがそんなことを怖がるなんてな。

「で…？ 俺についてきてくれっていうのか？」

「うん…ダメ？」

「近づかなきゃいいだろうが…」

「だって…ピアノ、練習したいんだもん」

そう言って亜姫は、甘えるように俺を上目遣いに見た。不覚にも、俺は彼女の狙いどおりに心を動かされかけて、慌てて顔を逸らした。

「おまえ、ピアノなんか弾くのかよ」

「うーん、あんまりうまくないんだけど、ちょっとだけね」

「…今日だけだぞ」

幸か不幸か、今日は部活が休みだ。もちろん、亜姫もそれを知っていてこの話を持ちかけたのだろうが。

仕方なく、俺は無愛想に答えた。

亜姫の表情がぱっと明るく輝く。

まったく、そんな顔されちゃ、俺も断れないだろうが。

亜姫に手を引かれて向かった先は第二音楽室だった。第一音楽室のように、著名な音楽家の肖像画がかかっているわけでもなく、音楽ホールのように弦楽器や管楽器が準備されているわけでもなく、ただグランドピアノが中央にでんと構えているだけのシンプルな部屋。

こうした特殊教室が複数あるのも、少子化のご時世で未だに一定以上の生徒数を確保している私立校ならではだろうか。

俺は無造作に並べられていた椅子の一つを手繰り寄せ、それに腰掛けた。亜姫はピアノの前に座ると、鍵盤の蓋を開ける。と、そこで俺に手招きをした。

「もっと近くにいてよ！」

「チッ…分かったよ」

俺は椅子ごと、彼女の弾こうとするグランドピアノへ近づいた。

亜姫はそれに満足そうに頷くと、両の手を鍵盤にそっと乗せて息を吸い込んだ。

次の瞬間、旋律が部屋の中に反響した。

へえ…。

思わず俺は目を見開く。

ピアノどころかクラシック音楽全般に詳しいわけではないし、今、自分の耳に入ってくるのがなんという曲かも知らない。ただ、それはどこか哀しくて、そしてどこか妖しい雰囲気をもっていた。

彼女がこんなにピアノを弾けるなんて、俺は初めて知った。

音楽室の窓からは、コの字になった建物の向こう側の棟の廊下が見える。廊下を通りかかった女生徒が、こちらを見つめて立ち止まっていた。

やがて曲は終わり、亜姫はふう、と息をついた。

俺は思わず椅子から立ち上がり、彼女のそばへ近づいた。ピアノの前に座る彼女を、立ったまま俺は見下ろすようにして見つめた。

「…驚いたな。正直、こんなに弾けるとは思ってなかったぜ？」

「褒めてくれてるの？」

「フン…」

嬉しそうに俺を見上げる亜姫の顔に、俺はついそっぽを向いて鼻を鳴らした。

本当はもっと素直に言ってやろうと思っていたのに、こいつが嬉しそうな顔をするたびに俺は、何故かそんな反応ばかりしてしまう。我ながら稚拙な反応だと思う。

だが亜姫は、そんな俺の態度を気にした様子もなく、笑顔で自分の座っている椅子をぼんぼんと叩いた。俺が怪訝な顔で彼女を見返すと、亜姫は少し自分の座っていた位置をずらして、場所を空けた。

「隣、座って♪」

「…？」

言われるままに隣に座る俺に、亜姫は少しイタズラっぽく微笑むと、俺の腕を取った。

「知ってた？ いま、この部屋にあたしたち2人っきりだよ？」

「な…」

思わず言葉を失う俺を、亜姫は楽しそうに覗いている。

チッ…この俺が亜姫に遊ばれるなんて。

すぐに俺は、いつもの自分を取り戻して、にやりと笑ってやった。

「そうだな…。じゃあ、どうする？ キスでもするか？」

「え…う…うん…」

今度は亜姫が言葉に詰まる番だった。

俺は笑みを顔から消し、彼女を見つめた。彼女も同じように、俺の顔を真剣に見詰める。

そのまま俺たちの顔は近づき、そして重なり合った。

亜姫とのキスは、なんだかふわふわしていて、夢く感じられた。

初めて、亜姫とキスしたその日。

俺は家に帰ってから、眩暈を感じて危うく階段から落ちそうになった。

(4)

---

★ ★ ★

あれから、俺は1枚の写真を手に入れた。

めいっぱいの笑顔をカメラに向けている一人の少女が収められている。

文化祭だろうか。

背景では、小さくてよく分からないが、何かの装飾を施されている教室が見てとれる。

その写真を、俺は先ほど目に付いた写真立てと並べて置いている。

自分があまりに感傷的すぎて、思わず1人で苦笑を浮かべた。

★ ★ ★

目を覚ますと同時に計った体温は、37℃を越えていた。

もう夏だというのに、背中がぞくぞくする。

夏休みに入ってから、俺は完全に体調を崩しきっていた。

理由はなんとなくわかってる。

それでも、その高熱を推して俺は着替えを済ませ、外へと出た。

夏休みは毎日のように亜姫と会っていたい。俺はそう決めていた。

部活を休んで彼女に会いに行くなんて、俺には出来ない。部長という立場もあるし、そんなところを誰かに見つかったら大変なことになるだろう。サッカー部は大所帯だ。俺は全員の顔をすぐさま思い出せる自信はないが、部員たちは部長である俺の顔はしっかり覚えているだろう。顔を知っている人間が多いということは、目撃される確率が高いと予想できた。

だから、体調が悪いからと部活を休めば、亜姫にも会えなくなる。

そんな無理の繰り返しで、体調が回復するはずもなかった。だが、俺はそれを続けるしかなかった。

もう俺に残された時間は少ない。

根拠はないが、漠然とそう感じていた。

「秀真…大丈夫？　なんか顔色悪くない？」

さすがの亜姫も、俺の変調に気付いたようで、何度かそう心配してくれたが、俺は部活疲れなんだとごまかした。

「なあ…こんどあそこの河川敷でやる花火大会、一緒に行かないか？」

俺の提案に、亜姫は目を丸くした。

「秀真から誘ってくれるなんて珍しい～！　うん、行く行く！」

そう言って亜姫は、うちにある浴衣を母親に出してもらわなくちゃ、などとはしゃいでいた。俺はその姿を目を細めて見つめる。

派手な音と共に、闇夜を鮮やかな色とりどりの光が照らし出した。

亜姫は嬉しそうにそれを眺める。

予告どおり、彼女は浴衣を着てきていた。

いつだったか、亜姫が気にしていたような周囲の視線は、今でもあった。けど亜姫も、そして俺も、気にしないことにしていた。

花火はたぶんキレイだったんだと思う。

だが、俺は隣ばかり見ていた。亜姫の浴衣姿が気になったというのも、確かに理由の1つだと思う。けど、それ以上に俺の頭を占拠する考えが巡りつづけていた。

「終わっちゃったね…」

最後を締めくくる100連発だかなんだかの白煙もまだ消えぬうちに、人々は帰り道へと方向転換し始める。俺たちは流れに飲まれないように隅に寄り、余韻を感じるように空を見上げた。

ぼんやりと俺は、流れ行く白煙を見つめていた。

気がつくと、亜姫はぎゅっと俺の手を握り締めていた。俺はその手を、力強く握り返そうとする。

周囲の人影もまばらになり始めた頃、俺は今しかないと思った。

最初から分かっていたことだった。

「…亜姫」

「…なあに？」

そう言って俺を見つめる彼女の表情は、いつものように無邪気なものではなかった。たぶん、俺の気配を察知したのだろう。その瞳は不安で彩られていた。

「…」

彼女と正面から向き合って、俺は言葉に詰まった。

本当にいいのか？

いや、決めたじゃないか。

このままでずっといられるはずはないんだ。

「…言わなくちゃいけないことがあるんだ」

「…？」

俺は搾り出すようにして、そう言った。

首を僅かに傾げて、俺から目を逸らさないでいる亜姫。俺は彼女の髪をそっと撫でた。

いや、正確には…俺の手は何かを掴むようにして空を切った。

「秀真…どうして、そんな顔してるの？」

「…亜姫」

俺は静かに告げた。

「おまえは、死んでるんだよ」

真夏だっていうのに、どこか肌寒ささえ感じるような冷たい風が、すっと吹き抜けたようだった。

亜姫は口を半開きにさせたまま俺を見上げていた。

「え…？」

やっと、彼女はその口から声を漏らした。

「ちょ、なに言ってるの？ 秀真、大丈夫？」

そう言って笑い飛ばそうとしながらも、彼女は不安を拭いきれない表情だった。

「俺たちが出会った交差点、あるだろ？ あのとき…おまえが声をかけてきたあの時から、俺にはもう分かってたんだ。昔から……靈感っていうか、この世とは別にある存在を見てきたから」

「…秀真、本気で言ってるの？」

「今までのことは全部、それで説明がつく…」

1度それを口にしてしまったら、もう後戻りはできない。

それを分かってるから、俺は堰を切ったように続けた。

なぜ学校で会っても話し掛けなかったのか、デート中に周囲の人間はなぜ俺たちを訝しげに見ていたのか、そしてピアノの七不思議は…。

「昼間でも、見える霊はたくさんいる。といっても、さすがに最初におまえを見つけたときは、俺も驚いたけどな」それは亜姫に限ったことではなかった。うっすらとだが、何度か見たことがある。夜にしか姿が見えないなんて迷信でしかない。

亜姫は言葉を失って立ち尽くしていた。

まさか、自分が怯えていた音楽室の幽霊とは、自分自身のことだなんて、夢にも思わなかっただろう。

「…うそでしょ…？」

自分の手の平を見つめ、彼女はそう呟いた。

「おまえは、あの交差点で事故に遭ったんだ。きっとあまりにも突然で、何も分からなかったんだろうな」俺は目を伏せてそう言いながら、唇を噛んだ。

いつからだろう。

自分のことにも気付かないでいる浮遊霊を、俺が本当に好きになったのは。

そんな関係がずっと続くはずなんてなかったのに。

「うそだよ！ だって、だって幽霊が、人を好きになるはずないもん！」

「あると思うぜ」

動揺を露わにする亜姫に、そっと諭すように言った。

「幽霊を好きになる人間がいるんだからな。逆だってあるだろ」

俺を見つめ、そして自分の手の平をもう1度見つめ、彼女は縋るような視線を俺に向けた。

それにいたたまれなくて、俺は俯いて視線から逃れようとする。

「…できるなら、もっと…。ずっと、一緒にいたかった。でも、おまえに事実を気付かれないように、そんなこと続けるのは無理なんだ。おまえは…俺がどんなに年とっても、高校生のまんまなんだから」

「秀真…」

ふと顔を上げると、彼女の目には涙が溜まっていた。

それは本当に涙なのか、それとも俺の錯覚なのか、事実はわからない。でも俺は、それに十分に影響されて、思わず天を仰いだ。

「秀真は、あたしが幽霊だって知ってて…それでも、つきあってくれて、好きになってくれたの…？」

「言っただろ。最初から知ってたって」

初めて会った交差点。気配を殺して近づいてきた犯罪者ならまだしも、何気なく声をかけてきた女子高生の気配に気付かないほど俺はぼんやりしていなかった。

「もう少し…本当にあと少し、早く出会えてれば…そうすれば、おまえのことは俺が全力で守ってやったのに」

次の瞬間、俺は彼女を抱きしめていた。

腕の中にあるのは、自分自身だけのはずなのに、しっかりと彼女の身体の手触りが伝わってきた。その温もりさえ肌を感じられて、俺はそれだけで、胸がいっぱいになるような気がした。

「ねえ…あっちって、どんな感じかな？」

「あのな。俺が知ってるわけないだろ」

薄暗い道を並んで歩きながら、ふと呟く彼女に、俺は呆れて言った。そりゃ亜姫だって行ったことないんだろうが、直線距離で言えば俺より近い位置にいるはずだ。どちらかと言えば俺が教えてほしいくらいだ。少なくとも俺には死んだ経験がない。

「やっぱり、お花畑とか広がってて、みんな歌ったりして過ごしてたり、そんなのかな」

なるほど、それはよく見聞きするイメージだ。

「そういうのがいいのか？ おまえは」

「どうだろうね……別に嬉しくはないかも。地獄みたいなところがいいわけじゃないけど、そんなに穏やかなのもね……一応あたし、まだ高校生だったし」

当然のように過去形を使う亜姫。

今日は確かに浴衣を着てきたが、普段は制服で現れるくせに。おまえはまだ高校生だろ、と言いかけてやめた。彼女が受け入れようとしているのに、俺が耐えられなくてどうする。

「変わらないだろ」

「え？」

「良くも悪くも、今いるこの世界と変わらないんじゃないか？ だって、場所が変わっただけで、世界を作ってるのは元はここで生きてた、同じ連中なんだぜ」

それもそうか、と彼女も笑った。

亜姫の反応を見る限り夢を壊すことにはならないようだったので、俺は率直な予想を言った。過度に期待しない方がいいんじゃないかとも思った。

まるで、いつものような時間が流れていた。いや、たぶん意識して作っていたんだと思う。いつもみたいに、最後まで過ごしていたい。それがなんだか、存在証明みたいだと。

「他の女に手出したら殺すからね」

「そのセリフ、おまえの場合シャレにならないんだよ」

話題が、彼女の特殊な立場を中心にしているという点だけが、いつもの差だった。それも半ば開き直りのように、彼女はすべて冗談にしているようだった。

だが、もうすぐ国道に差し掛かろうというところで、彼女は足を止めた。

「…秀真、約束してほしいの」

「なんだ？」

「ちゃんと、精一杯生きてね。こっちに来ようとしても、追い返してやるんだからね」

「…。ああ」

分かってるよ、そんなこと。

おまえは本当は、もっともっと生きていくはずだった。生きていたはずなんだ。そんなおまえの姿を見てきたから。自分の死にも気付かないくらい…霊となりながらも生命力に満ちていたおまえの姿をみてきたから。だから俺は精一杯生きてやるよ。

「そうだ…おい」

俺はバッグからデジカメを取り出した。

そして道を囲むようにして立つブロック塀の隙間に、それをそっと置く。

「なに？」

「記念。いいだろ？」

そう言って俺はセルフタイマーをセットした。

急いでレンズの射程へと移動する。亜姫は戸惑った様子で俺の隣に立った。

「…笑えよ。記念、だろ？」

亜姫はうなずくと、俺と腕を組んだ。刹那、フラッシュが周囲を照らす。

画面を確認すると、彼女はめいっぱい微笑んでくれていた。逆に俺のほうが、妙に緊張して表情が硬くなってしまっている。

亜姫はそれを笑い、俺も苦笑を漏らした。

「ほんとに…天国がどんなところか知らないけど」

亜姫は繰り返した。

そして、言った。

「この何ヶ月か、天国みたいに幸せだった」

俺は目頭が熱くなるのを感じた。

背後でけたたましいクラクションが鳴り響く。反射的にそちらを振り返ると、国道をその音の主である大型トラックが走り抜けていくところだった。

「ありがと、秀真」

耳元で聞こえた亜姫の声に、俺は慌てて振り向く。

そこにはもう、彼女の姿はなかった。

「…亜姫？」

神々しい光が注ぐとか、そんなファンタジックな状況を理由もなく想像していた俺は、あまりにあっけない別れに、まだそれを飲み込めずに周囲を見渡した。

だが…やがて、俺は気配で悟った。

濃密なまでに感じられた彼女の気配は既がない。

そして俺の身体は心持ち軽くなったように感じられた。

「…亜姫…」

もう1度、その名を呼ぶ。

彼女の傷を広げないために。自分自身が耐え切れなかったから。

理由はいくつもある。

けど、事実は1つ。俺が自分の意志で終止符を打ったんだ。

それでも俺は、彼女の姿が目にとまるのではないかと、その場に佇んでいた。いつまでも、いつまでも、佇んでいた。

★ ★ ★

その後、プリントした写真には、彼女の姿はなかった。ただ何も無い道で、俺が1人で写真に収まっている。ただ組んだ腕だけが、僅かに何かの影のようになって映りこんでいた。

それでも、俺はそれを写真立てにおさめた。

俺の目には、彼女の姿が見えるから。

1枚の心霊写真。

それは俺にとって、最高の宝物となった。

たった1つ、心残りがあるとすれば、それは彼女に好きな花を聞いておかなかったこと。

俺は明日も、交差点に花を手向けに行く。

★ ★ ★